九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴィニーの哲學詩について

永田，英一

https://doi.org/10.15017/2556548

出版情報：文學研究. 33, pp.79-98, 1943-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ヴィニーの哲學詩について

永田英一

アルフレッド・ド・ヴィニー伯（le comte Alfred de Vigny）は一七九七年、佛國ツウレーヌのローシュに生れ、異色ある浪漫派の詩人として大きな足跡をのこし、一八六三年パリに逝いた。翌一八六四年、後事を託されたルイ・ラチスボンヌの手によつて遺稿詩集『運命』*les Destinées* の一卷が、「哲學詩」Poèmes philosophiques といふ副題をそへて公にされた。内容は左の十一篇、

「運命の使姫」les Destinées, 1849.（表題には『運命』と譯した）
「牧人の家」la Maison du Berger, à Éva, 1844.
「神託」les Oracles, destinée d'un roi, 1862.
「未開の女」la Sauvage, 1843.
「サンソンの怒り」la Colère de Samson, 1839.
「狼の死」la Mort du Loup, 1843.
「笛」la Flûte, 1843.
「橄欖の山」le Mont des Oliviers, 1843.
「海になげられた壜」la Bouteille à la mer, 1853.

「ヴァンダ」Wanda, histoire russe, 1847.

「精靈」l'Esprit pur, à Éva, 1863.

遺作といつても、大半はすでに『兩世界誌』上に發表されたもので、その折にも作者の希望によつて「哲學詩」といふ副題がそへられてゐたのであつた。史上、ヴィニーを語るのにかならず Poète philosophe（哲學者詩人）もしくは Poésie philosophique（哲學的詩歌）といふ言葉を用ひ、かれをもつてこの種の詩文學に成功したほとんど唯一者となすのは、ヴィニーその人にとつても會心のことであらう。

十九世紀のフランスの文人が人生に絶望したからといつて、それは一向めづらしいことではない。ヴィニーもその一人であるが、かれの場合にかぎつて、なぜ大きな絶望といはれるのか。またどうしてこの絶望はペシミスム、ストイシスムそして愛の哲學にまでゆきついたのか。われ〳〵は、こゝろみに、これをヴィニー獨自の精神の所業として考へてゆきたい。

ヴィニーにあつて、つねに主位をしめ、主權をふるつてゐたものは、浪漫期の人としてはめづらしく、感情でもなく想像でもなかつた。それは思考、推理、組織など、およそ理性の側の能力であつた、といふよりも、むしろ一切の心的活動を統御せずにやまぬ特異の天分であつた。かれはこの天分によつて感覺や想像のもたらす一切の現實をかならず差押へて、きびしくこれを省察し、整理し、組織して、そして一般的な理念にまで抽象せずにはゐられなかつたのだ。『わたしが自分にみとめる唯一の才能は組織化といふわたしの永遠の欲求だ。想念がうかぶと、わたしは、即刻、それにその形とその構成、その完全な組織をあたへる、』とかれは日記に書いてゐる。（傍點は原文のイタリック體。

以下この種の引用文は『詩人の日記』による。）

だから、作家としてのヴィニーは、まづはじめにこの理念、思想をもつてゐたわけで、言葉は訥々として後からつゞく從者にすぎなかつた。ヴィニーの靈感は思想だとか、かれには言葉の創意が缺けてゐるとかいはれるのは、疑ひもなくこのことをいふのであるが、ヴィニー自身も『思想が主人公だ』といひ、つとめて感興や惡魔や修辭の誘惑をしりぞけて、表現にたいしてはほとんど一種の遺恨をいだく程であつた。『沈默はわたしにとつて詩そのものだ』とさへかれはいふ。――かれの詩の獨創性は、まさにその思想にあるといはねばならない。

ヴィニーにあつてさらに見逃がしてならないものは、向上あるひは上昇のやみがたき意欲であつた。この意欲については、かれの場合、どんなに强調されても十分ではない。一八三〇年ごろ、ヴィニーは "*les Élévations*" といふ詩集（未完）を意圖して、このやうに名づけたのは、『これらの詩がすべて地上の映像から出發して、ずつと神性な展望にまで上昇し、（わたしにできるかぎり）わたしにしたがふ魂を高級な層圈におかずにやまぬからだ、』といふ。またこのことはかれを知るすべての人の認めるところで、ヴィニーはいつも高所にゐた、かれがたま〳〵翼をひろげて、山の頂きなどにとまれば、それはかれが人類に讓歩したのだとさへいはれる。

ヴィニーのこの意欲について、われ〳〵はさらにシャトーブリヤンに見られるやうな、あの優者（Homme Supérieur Orgueil）の矜恃を考へる。貴族、纖細な感覺、明敏な頭腦、文學的才能、その他さま〴〵な非凡の天稟、そして浪漫期といふ特殊な時代、――一八三〇年に詩人といへば、天才、豫言者、指導者、ほとんど神を意味してゐた――これらはたしかにヴィニーをして優者の矜恃をいだかせるに十分であつただらう。かれはこれを堅くいだいて、まるでそれが地上的なものに汚

されるのを恐れるかのやうに、ます〳〵高所へ向ふのであつた。――今もし擴がりや深さよりも、高さにおいて考へられねばならない文學者があるなら、それはまづヴィニーその人であらう。

以上、われ〳〵はわざと心情の側をさけてヴィニーの精神を理解しようとしたが、もとよりこれをもつて天才の精神の複雜性、多面性、そして何ものかをつくすべくもないのは自明である。たゞ、われ〳〵としては、ヴィニーといふ多情多恨の一存在から、いはゞかれの流儀にならつて、一つの特異な精神を抽出し、そしてそれをもつてかれの哲學詩を考へてゆくことが、あるひはこの詩人にたいして禮儀にかなつてゐるのではないかと思つたのである。高い（haut）、大きな（grand）、尙い（noble）、そしていはゞ男性的（mâle）な精神！

この精神にとつて、下界はあまりにたやすく絶望に値したといはねばならない。まづは人〻の無精神、低俗、矮小、下劣、女〻しさ……。そしてかれらの尙ぶ正義も、美德も、いづれその高さにおいて、その持續、その射程において、滿足からは遠いものであつた。かれらの喜ぶ幸福も、實は愚昧と無意識の產物にすぎないで、所詮みじめな、恥づべきものであつた。いひかへるなら、すべては給付と反對給付において、高い精神の期待を裏切るためにあつた。そしてこのことはます〳〵ヴィニーに苦澁を味はせ、つひにかれにとつて人〻は緣なき衆生、人の世は荒凉たる沙漠となつた。『人生の眞理、それは絶望だ。キリストの宗教も絶望の宗教だ……』また『希望はわれ〳〵の狂氣のうちで最大のもの、すべての怯懦の源……何よりもまづ人間の中に希望を絶滅しなければならない……』とかれはいふ。そして

この絶望は、高士詩人ヴィニーによつて、いかなる哲學詩的象徴を見出したか。

運命の前には優者も劣者も何ものもない。ありとあらゆるものはその指令の下に服さねばならない。人々は生れ、苦しみ、そしてラ・フォンテーヌのいふやうに『王様も、驢馬も、わたしも、わたしどもは死ぬであらう。』それはいつの世にも、いかなる世にも——

Depuis le premier jour de la création,
Les pieds lourds et puissants de chaque Destinée
Pesaient sur chaque tête et sur toute action.

〔世界創造の日から、運命の神の使姫たちの重い強い足がすべての頭と行爲の上にのしかゝつてゐた。——「運命の使姫」

✶引用の詩文はすべて意譯。〕

そして、古代には、

Elles avaient posé leur ongle sans pitié
Sur les cheveux dressés des races éperdues,
Traînant la femme en pleurs et l'homme humilié.

〔かの女たちは無情の爪を諸々の民の蓬髪の上にかけて、男や女をひきずつてゐたのであつた。——（同右）〕

そこへ一夜、天地震動して、救世主キリストがあらはれた。『おゝ主よ、運命は死せりや』と人々は叫び、自由近代の夜があけるかと思はれた。使嬪たちはやうやく爪をゆるめ、天上に翔けのぼつて、未來の掟をうかゞふ。天上の聲はそれに答へて、

Retournez en mon nom, Reines, je suis la Grâce.
L'homme sera toujours un nageur incertain
Dans les ondes du temps qui se mesure et passe.

〔誓つて、引返へしたまへ、女王たち、人間はいつ〳〵までも冷淡な時の波の中を、疊束なげに泳ぐであらう。——（同右）〕

娘たちの一隊は、ふたゝび地上の獲物にとびかゝる、

Oh! dans quel désespoir nous sommes encor tous !

〔おゝ！　何といふ絶望の中に、なほもわれ〳〵はゐることか！——（同右）〕

かくては、

Notre mot éternel est-il ; *C'était écrit ?*
——Sur le livre de Dieu, dit l'Orient esclave;
Et l'Occident répond ;—Sur le livre du Christ.

〔われ〳〵の永遠の言葉は『それは記されてゐた』ではないか？——東方では神の書の上に、そして西方ではキリストの書の上に。——（同右）〕

"C'était écrit" このファタリスムの合言葉を、ヴィニーはよほど愛惜したらしい。「運命の使姫」にはこれがエピグラフとして添へられてゐる。そして、この詩をそのまゝ哲學詩集の表題にしたいといふのも、かれの切なる遺志であつたと傳へられる。ヴィニーもまた、その透徹した高い精神ゆゑに、つねに生命の端々をあるき、運命とすれ〳〵に生きねばならない人であつた。

人間社會に絶望し、運命の呪縛の絶對を知つたとき、人々は何に慰安をもとめるか。浪漫派の人たちは女性、自然、そして神にはしるのがつねであつた。

ヴィニーも女性にもとめるところがなかつたわけではない。それどころか、孤獨な男の魂ゆゑに、それだけ多く女性にもとめるところがあつたであらう。

かれのサンソンは、不貞の女ダリラにさへ、

"L'Homme a toujours besoin de caresse et d'amour,

〔男はつねに愛撫と愛情を必要とする、——「サンソンの怒り」〕

と唄つてきかせる——。だが、ことの眞相は、

"Une lutte éternelle en tout temps, en tout lieu,

Se livre sur la terre, en présence de Dieu,

Entre la bonté d'Homme et la ruse de Femme,

Car la femme est un être impur de corps et d'âme.

〔永遠の闘ひが、地上では、時と處をとはず、神の前で、男の善意と女の術策のあひだにたゝかはれてゐる、女は身も心も不純なものだから。――（同右）〕

そして、つひに、

Et, plus ou moins, la Femme est toujours Dalila.

〔多少とも、女はつねにダリラなのだ。――（同右）〕

この詩については、よくヴィニーと女優マリ・ドルヴァルとの經緯がもち出される。實際、これの書きあげられたのは、かの女の裏切の決定的となつた直後であつた。けれども、ヴィニーの日記によると、かれはすでにその數年前から、ダリラの物語詩の腹案をもつてゐたのであつた。だから、ヴィニーの根本の女性觀は、こゝにその詩的象徴を見出してゐるといへるであらう。

つぎに、自然は、あのルッソーを陶醉させ、ラマルチーヌをして『だが自然がゐて、お前を招き、お前を愛してくれる、』と謳はせた自然は、ヴィニーにとつて何ものであつたか――。

かれは意中の――そしておそらく理想の――女性エヴァを誘うて、人里はなれた自然の中にゆき、かの女のために牧人の家をころがしてやらうとする。しかしこのやさしいヴィニーにも、自然は何と語つたか、

"Je suis l'impassible théâtre
Que ne peut remuer le pied de ses acteurs;

Mes marches d'émeraude et mes parvis d'albâtre,
Mes colonnes de marbre ont les dieux pour sculpteurs.
Je n'entends ni vos cris ni vos soupirs ; à peine
Je sens passer sur moi la comédie humaine
Qui cherche en vain au ciel ses muets spectateurs.

"Je roule avec dédain, sans voir et sans entendre,
A côté des fourmis les populations;
Je ne distingue pas leur terrier de leur cendre,
J'ignore en les portant les noms des nations.
On me dit une mère et je suis une tombe.

〔『わたしは不感不動の劇場で、役者たちの足もこれを動かすことができない。わたしの碧玉の階段も純白の舞臺も大理石の柱も、神々の刻んだものだ。
わたしは君らの叫びも吐息もきかない、わづかにわたしの上を通りすぎる人間劇を感じるのみで、無言の觀客を天にもとめても空しい。
『わたしは侮蔑をもつて、目もくれず耳もかさず、蟻群のやうな人々のそばを過ぎてゆく、わたしはかれらの棲家と死灰の見わけもつけず、諸々の民を擔ひながらその名も知らない。人はわたしを母だといふが、わたしは墓なのだ。――「牧人の家」〕

これが自然の本音であつた。母なる自然のやさしみの下に、墓なる自然のこの冷酷がかくされてゐる。ヴィニーは、愛人を伴ひながらも、それを見拔かずにゐられなかつたのだ。これはもう慰める自然ではない、無關心な、そして敵意ある自然であつた。しかも自然は、永遠に恬然として、その全き自己充足を誇つてゐる。ヴィニーの矜恃はいさゝか傷つけられたのであらうか、『いたるところで自然がわたしを侮辱する』とかれはいふ。そして、ます〳〵かれは人間のはかなさを思ふとともに、『考へる葦』の名譽をふかく省るのであつた。

すると、神は、あの『神に醉へる人〻』の行列をしたがへた神は——

キリストはつひに橄欖の山にわけ入つた。それは夜であつた。眠りこんだ弟子たちをのこして、かれはひとりゲツセマネの岩間をさまよふ。斷末魔の苦しみがかれの胸をしめつける、

Il se courbe, à genoux, le front contre la terre;
Puis regarde le ciel en appelant : "Mon père !"
——Mais le ciel reste noir, et Dieu ne répond pas.

〔キリストは身をかゞめて、跪き、額を地につけて、そして天を仰いで呼ぶ『わが父よ！』——しかし天は暗いまゝで、神の答へはない。——「橄欖の山」〕

さらに三度、かれはその父を呼ぶ。答へるものは風の音……　イエスはいふのであつた、

"O Père, encor laisse-moi vivre !

.....

Ne sens-tu pas le monde et tout le genre humain

Qui souffre avec ma chair et frémit dans ta main ?

.....

Mais je vais la quitter, cette indigente terre,

N'ayant que soulevé ce manteau de misère

Qui l'entoure à grands plis, drap lugubre et fatal,

Que d'un bout tient le Doute et de l'autre le Mal.

〔おゝ父よ、もつとわたしを生かせて下さい！……あなたは、わたしの生身とともに苦しみ、あなたの御手の中にふるへてゐるこの世界と人類を感じないのですか？……

けれども、わたしはこの赤貧の地を去らうとしてゐる、大きな襞でこの地をつゝむ悲惨の衣をほんの持ちあげたばかりで、忌はしい布、疑惑と禍がそれをとらへてゐます。——（同右）〕

この悲痛な訴へにも、

Comme un marbre de deuil tout le ciel était noir.

〔冷たい喪の大理石のやうに天は眞暗であつた。——（同右）〕

そして、突如、闇の中に足音がきこえ、ついで、ユダの松明のゆれるのが見えた。あゝ、つひにオーギュスチヌスもいふやうに『神はその子さへも容赦しなかつた。』

かくては、

S'il est vrai qu'au Jardin sacré des Écritures,
Le Fils de l'Homme ait dit ce qu'on voit rapporté,
Muet, aveugle et sourd au cri des créatures,
Si le Ciel nous laissa comme un monde avorté,
Le juste opposera le dédain à l'absence
Et ne répondra plus que par un froid silence
Au silence éternel de la Divinité.

〔ほんとうに、聖書の神苑で、人の子キリストがあのやうに告げたのなら、また萬物の叫びにも無言で、眼をとぢ耳をふさいで、天がわれ〳〵を流産した世界のやうに見捨てたのなら、正しいものは神のおこたりに侮蔑をさしむけるであらう、そして永遠の沈默には冷やかな沈默をもつてのみ應へるであらう。――（同右）〕

"le silence" と題されたこの結びの一節は、ヴィニー生前の「橄欖の山」には見られなかつたのであつた。おそらく編者ラチスボッヌによつてかれの日記の中から拾はれたものであらう。とにかく、これはヴィニーの神にたいする絶唱としてあますところがない。

しかし、われ〳〵はこれについて無神論、ジャンセニスム、理神論、さてはバイロン流の不敬虔を云々するのは差控へよう。ヴィニーは、根本においては、決して自己の外の主義思想には動かされなかつた人だし、またいかなる時

にも、高貴な人間としてのつゝしみを忘れなかつた人だ。われ〳〵としては、むしろ、神にたいしてさへも失はれなかつたヴィニーの知性の明晰と大膽と、そして天上の沈默にたいしては自己の沈默をもつて應へようとするかれの精神の不羈を想ふべきであらう。

女性、自然、神、これら浪漫派の三部作の主題にたいしても、ヴィニーはつひに絶望した。そしてこれはすでに大きな、いはゞ形而上の絶望であつた。すなはち、かれ獨自のペシミスムであつた。

すると、この絶對遍在の惡にたいして、またこの決定的なペシミスムにたいして、ヴィニーの精神はいかに對處したか——。

獵師に追はれ、銃彈に射ぬかれ、犬に嚙みつかれた狼は、冷やかに攻擊者を眺めながら、一聲もあげずに死んでゆく。

Comme on doit quitter la vie et tous ses maux,
C'est vous qui le savez, sublimes animaux!
A voir ce que l'on fut sur terre et ce qu'on laisse,
Seul le silence est grand ; tout le reste est faiblesse.

「人はいかに生と禍を去るべきか、それを構へてゐるのは君たちだ、崇高な動物たちよ！　地上で人のありし姿と人の遺せるものを見るに、ひとり沈默のみが偉大で、その餘のすべては卑小である。――「狼の死」」

そして、狼の眼はいふのであつた、

Gémir, pleurer, prier est également lâche.
Fais énergiquement ta longue et lourde tâche
Dans la voie où le sort a voulu t'appeler,
Puis après, comme moi, *souffre et meurs sans parler*.”

「呻くも、泣くも、祈るもひとしく卑怯だ。力づよく君の長い重い仕事を果せ、運命の呼びよせた道の中で、そのあとで、自分のやうに、よく耐へてそして何もいはずに死ね。――（同右）」

これは疑ひもなくストア學派のいふところと一致してゐる。だが、ヴィニーの意味する克己諦感は、あくまで精神的存在の名譽として考へなければならない。『名譽あるひは男の廉恥、それが良心だ』とかれはいふ。かういふヴィニーについて、サント・ブーヴは、アカデミーの同僚の中でもかれはもつとも良心的な男だつたと述懷してゐる。ヴィニーの名譽尊重のほどが察しられるであらう。そしてこの高き精神の名譽は、かれの場合はつねに、天上の不尊にたいしても、地上の愚劣にたいしても、大きな沈默によつて保たれる、――こゝにかれのストイシスムの特異性がある。

それなのに、同時代の感情の信奉者たちは、隨處に徒黨をくんで、『呻き、泣き、祈り、』大言壯語し、そしてそれをもつて詩人の本領であるかのやうに心得てゐたのであつた。ヴィニーは浪漫運動にも、その狂妄においては、決し

て參加しなかつたのであつた。その後、かれは『象牙の塔』にとぢこもつて、苦行僧の頭巾をかぶり、瞑想し、超克し、精神の名譽を守りつゝ『卑怯な動物は群をなしてゆく。獅子はひとり沙漠をあるく。詩人はつねにかうして歩くやうに、』といつてゐた。こゝにおいてわれ〳〵は、あのストア學派の理想とした不動心(Ataraxia)の境地と、そしてさらに東方の涅槃(Nirvana)のそれを想ふであらう。ヴィニーが次代のパルナッシャンへ——あの無感動(Impassibilité)を理想とした詩派へ——道をひらいたといはれるのは道理である。

つぎに、この大きな絶望はいかなる方向をとつたか。急轉するかのやうに、それは大きな愛(Amour)へ、憐憫(Pitié)へであつた。こゝでもヴィニーの一般化の頭腦は、個〻の不幸を社會的連帶において考へさせたともいへるであらう——。

しかし、ヴィニーはもと〳〵いかなる意味のエゴイスムをも持合はさなかつた人で、奉仕(Service)したいといふ欲望を本能のやうにもつてゐた。軍隊にゐた間も、かれはつねに實戰に參加することばかり願つてゐた。シャラントのメーヌージローの館にゐた時も、かれは農民のよき友であり、地方文化のよき協力者であつた。そのころ館に傭はれてゐた一老媼は『……あゝ、よい旦那樣、何と立派な心の人だつたでせう！わたしたちは、五六人、男や女や、あそこのメーヌで召使をしてゐましたが、あの方のためなら、誰でも爭うて火の中へとびこんだでせう……』と懷しんでゐる。また晩年には、若い文學者を可愛がり、バルベ・ドールヴィリ、ボードレール、ミストラルなどは、しば〳〵かれのところに出入してゐた。

その上、ヴィニーはかねてから詩人、天才の社會的使命を自覺してゐて、心中ふかく期するところがあつたのであ

る。

かういふヴィニーが目のあたりに無智と悲惨とにゆだねられた人類をみて、憐憫をおぼえない道理がない。ラチスボッヌなどは、かれの詩神を憐憫だといつてゐる。すると、あの超越的な勢力にたいするヴィニーの挑戰も、かういふ意味において、一層よく理解されるであらう。

たとへば、神にたいして、最後の審判には、『神こそすべての魂、生きとし生けるものゝ前にきて自らを釋明すべきであらう。神は出頭して語り、何故の創造か、何故の無辜の苦しみか、死かをはつきりといふべきであらう。その時には復活した人類が審判者となるであらう……』ともかれはいふ。神の創造の不正といふことは、ヴィニーのいはば固執觀念であつた。そしてこのやうに歴史的現實の責を天上のものに負はせようとするところにも、ヴィニー獨自の傾向がうかゞはれるであらう。

また自然にたいしては、

Vivez, froide nature, et revivez sans cesse
Sous nos pieds, sur nos fronts, puisque c'est votre loi;
Vivez, et dédaignez, si vous êtes déesse,
L'homme, humble passager, qui dut vous être un roi;
Plus que tout votre règne et que ses splendeurs vaines,
J'aime la majesté des souffrances humaines;

Vous ne recevrez pas un cri d'amour de moi.

「生きよ、冷たい自然、そしてたえず甦れ、われらの足の下、額の上に、それが君の掟なのだから、そして女神ならば、君の王たるべき人間、貧しい行人を侮蔑せよ、君の一切の權力よりも、またその空しい光輝よりも、わたしは人間の苦惱の莊嚴を愛す、君は愛の一聲もわたしから受けないであらう。――「牧人の家」」

とヴィニーはいふ。この終りから二つ目の句はあまりにも有名な詩句だ。その思想の深さにおいて、その形式の完成、その感情の高貴において、フランス詩歌のうちでもつとも美しいものゝ一つに數へられる。

ところが、近代の知性ポール・ヴァレリーは、その『文學論』の中で、この詩句の美しさを讃へてゐるのはよいが、『この句については考へてはならぬ。なぜなら人間の苦惱にはもと〳〵莊嚴なんかない筈。……意味の上からいへばこの美しい詩句はまつたく零なのだ。』といつてゐる。思はざるも甚だしい――。

ヴィニーは一八四二年、同じくエヴァにあたへて、「七つの苦しみ あるひは男の苦しみ」といふ詩の草稿をしたゝめてゐる。これが實は「牧人の家」であつた。その中で、かれは『……お前は男の苦しみ(malles douleurs)を眺めるであらう……』と書いてゐる。これが人間の苦惱(souffrances humaines)であつた。ヴィニーといふ男によつて精神化された苦惱なればこそ、この莊嚴なのである。そして、この句の思想については、誠實無比のヴィニーその人が語つてゐる、『この一句はわたしのすべての哲學詩の意味を含んでゐる、すなはち人類の精神、人類への全的愛そしてその運命の改善。』

大きな絶望の詩人ヴィニーは、かうして大きな愛の思想家であつた。ヴィニーはたしかに近代の象徵主義――ヴァレリーもこれに屬してゐる――に先驅した人のひとりであるが、この派に見られる淺薄からはおよそ緣遠い存在であつ

た。デカダンスやシニスムや、韜晦の趣味からまぬがれてゐたのはいふまでもない。

ヴィニー獨自の精神は、なほも高所をめざして、さらに大きく、さらに尙くなることをやめなかつた。そしてつひに悠久の彼岸に生きようとする——。

かれは未知の一青年にさとして、詩人の作品は海になげられた壘だといふ。その中に書きとめられた詩人の精神は、思想は、大洋の波をこえて、いつか花咲く岸邊にたどりつくであらう、

Le vrai Dieu, le Dieu fort est le Dieu des idées.

〔眞の神、强い神は思想の神なのだ。——「海になげられた壘」〕

したがつて、その中味はかれのいふ『靈藥』でなければならない。あくまで純粹な、自己の內面の必然性から、いはゞ自己の內的宿命から追求せられた思想でなければならない。ヴィニーの「チャタートン」は、この內なるものゝ要求もだしがたく、世俗に抗して、みづから生命をたつた。そしてヴィニーのロマンチスムも、それ自體においては、この種の自我主義だとわれ〳〵は思ふ。

かうして得られた神の思想をもつて、詩人は現世に顧慮することなく、

Aux voyageurs futurs sublime testament

〔未來の旅人に崇高な遺書——（同右）〕

を書かねばならない……

そしてつひにヴィニーその人にも、これをしたゝめるべき時がきた、

"....le dernier vivant monte au temple et s'inscrit,

.....

.....sur le pur tableau des livres de l'*Esprit*."

〔遠い祖先の血統の最後の生存者（ヴィニー）は聖廟にのぼつてそして記帳する....精神の書卷の清らかな名簿の上に。――「精靈」〕

「精靈」はヴィニーの死の六ヶ月前の作であつた。サントーブーヴはこれについて『かれ（ヴィニー）は、かれの遺作『運命』一卷を結び、これに王冠を戴かせてゐる極めて美しい、「精靈」と題する一篇の中で、かれみづからの鑿をもつて、かれみづからの變貌と祀神をなしとげた、』といつてゐる。

そしてこの崇高な遺書の中に、ヴィニーはかう書きつけた、

Ton règne est arrivé, *Pur Esprit*, roi du monde!

〔お前の天下がきた、精靈よ、世界の王よ！――（同右）〕

――あの高い、大きな、尙い精神は、もはや靈界の清明にゐるといへるであらう。

ヴィニー獨自の精神は、かうしてつひにその『約束の地』を見出したわけであるが、顧つてみれば、かういふ行き

方そのものが、實は大きなロマンチスムであつたといはねばならない。なぜなら、十九世紀のあの時代は、シェリーもいふやうに『詩人と哲學者が無冠の世界立法者である』ことを許された特殊な時代であり、ヴィニーその人は、あくまで高く、

L'idéal du poète et des graves penseurs

（詩人と重厚な思想家の理想――（同右））

をかゝげて、この時代をもつとも正直に生きぬいた人だからである。

（註）

八一頁　『詩人の日記』……*Journal d'un Poète*, 1867. (Louis Ratisbonne 編)

八六頁　マリ・ドルヴァル……Marie Dorval (1789—1849), ヴィニーとの訣別は一八三八年。

九二頁　サント・ブーヴ……Sainte-Beuve, *Nouveaux Lundis*, VI, (Alfred de Vigny)

九三頁　軍隊にゐた間……一八一四年から一八二七年まで、實戰參加は果さなかつた。

九三頁　メーヌジローの館……Manoir du Maine-Giraud (Charente) 主として一八四八年から一八五三年まで滯在。

九三頁　老媼の言……Léon Séché, *Alfred de Vigny*, p. 348.

九五頁　ポール・ヴァレリー……Paul Valéry, *la Littérature*, 1930.

九六頁　「チャタートン」……戲曲、*Chatterton*, 1835. その他、劇作には *la Maréchale d'Ancre*, 1831, 散文作には *Cinq-Mars*, 1826. *Servitude et Grandeur militaires*, 1835 などがある。なほ生前の詩作には *Poèmes Antiques et Modernes*, 1826 (Moïseを含む) があるが、ヴィニーの面目はほとんど『運命』一卷につきる。